

洲崎晴嵐

ふき払い雲も嵐もなかりけり

洲崎によする波も静かに

洲崎台は現在の八幡台一丁目にあたる場所で、以前は印旛沼を見下す景観のよい高台であった。昔白井城のあった頃、ここは北の要所として砦が築かれていたといわれる。住宅地に造成されるまでは、このあたりの丘陵は一面の広い松林となっていた。また沼辺に耕地が開拓される前は、この洲崎台下（八幡下）まで印旛沼の水が寄せ、そこには長い洲が広がっていた。その砂浜の上では、鷗や鷺が翼をひろげて休み、岸辺の浅瀬には魚やエビがたくさん住んでいた。晴嵐とは、晴れた日に吹きわたる山風のことであり、前掲の歌にある嵐は靄を意味している。洲崎台に山風が吹き、山の霞も湖面の靄も払われてすっかり晴れ渡ってきた、八幡下の洲崎に寄せる波も静かで、すばらしい風景がひろがっている。沼辺には白鷺の姿があり、松林は風に鳴って琴の音のように聞えてくる。日中の静けさのなかで、明るく晴れ渡った洲崎の眺めはまことに見事なものである、と歌はその情景を詠んでいる。

選文 立原 三知男